

学芸員の役割・養成課程に関する 調査結果

学芸員の役割

学芸業務において役割を発揮することが前提

- 学芸員には調査研究を始めとする専門スキルが求められ、それらは大学の学芸員養成課程で磨かれるべき。
- 博物館が生み出した価値を社会に還元するためには、研究スキルに加え、教育・普及に資するスキルが重要。

地域との連携・地域住民への価値の還元が重要

- 「地域住民とともに活動しながら研究で得られた成果を還元」、「地域とのネットワーク構築」、「地域の博物館同士の連携促進」など、学芸員には「地域と関わり、地域に価値を還元する」ことが求められている。
- 地域との連携は、地域に密着した市町村レベルの学芸員において特に求められるもの。

博物館運営能力の必要性

- 「館を訪れた人をもてなす対人関係能力」、「博物館の運営に係る経営や事務スキル」など、博物館の運営等の経営管理や来館者業務に関するスキルも重要。
- 経営管理に関する役割は、本来学芸員以外の専門的スキルを持つ職員が配置されるべきだが、財政的余力がないため、学芸員が経営スキルを身に着けざるを得ない。

観光資源化による学芸員の負担増

- 学芸員の業務は多岐に渡るため、博物館の観光資源化は学芸員の負担を大きくする。
- 学芸員資格がなくとも観光振興を担う専門職の新たな設置や、学芸員養成課程に博物館と観光との関わり方に関する科目を設置し、観光に対する学芸員の理解の深化を図るべき。

SNS等を通じた広報活動

- 博物館情報を对外発信するツールとして、SNS等を利用した若年層を含めた広報が必要。
- 情報の提示は画像や動画、資料の解説も含めたコンテンツが有効。

学芸員養成課程

学びの内容

- 地域との関わりが重要であり、地域と博物館の関りを学ぶことが出来るような科目を設置すべき。
- また、博物館の成果を社会に還元していくための方法論や観光振興のために必要な発掘・調査研究のスキルを教示すべき。
- 現場での専門技能より、教養的な基礎能力を重視。博物館理論や哲学的思想、リベラルアーツを身につける。
- 目指すべき学芸員像や必要科目・学習内容のガイドライン、学芸員のキャリアパスの明確化。
- 従来の知識伝達型ではなく、アクティブ・ラーニングを通じた学生の主体的な学びを促す。

博物館実習

- 大学と実習現場の連携強化。
- 実習先や実習期間等について、博物館実習のガイドラインを明確にすべき。
- 実習期間について、「長期化し現場ニーズに基づいた教育をすべき」とする意見がある一方、「就職の保証がない中での長期化は難しい」とする意見もあり。
- 実習内容については、地域交流を通じた『コーディネート力』、事前の学内実習の義務付け、実習においても技術に留まらない基礎教養の習得等、その充実を求める意見があった。
- 実習に対する学生の意識の希薄さ、実習先とほぼ関わりのない学生の申込みなどを問題視。

- 現行の養成課程は、科目の立てつけに注目すると、博物館の持つ機能に注目した「機能論」に終始していることがわかる。これからの時代においては、「機能論」ではなく、**機能を発揮した成果をどのように社会に還元していくか**ということにフォーカスした内容に変えていく必要があるだろう。
- (前略) 博物館と観光とのかかわりについては、現行の博物館経営論等で扱うことが妥当であると考える。
- めまぐるしく環境が変化していく中で、知識を「教える」教育から、学生が自ら「学ぶ」という主体性を重視した教育に、教育のあり方が変わりつつある。学芸員養成課程についても、**学生が主体的に学ぶようなカリキュラムを構築していく必要がある**と考える。
- 博物館・美術館には、国際的な視野を持った運営が求められるようになってきている。そのため、学芸員についても**博物館・美術館の国際化への関わり方について学ぶ機会を用意することが必要**である。
- 学芸員養成課程のカリキュラムを考える際に、都道府県立や国立レベルの大規模中核館の事情だけを考慮しても現場の実態に即したものにはならない。小規模館の実態に即して、「**博物館と地域社会とのかかわり**」を意識したカリキュラムを構築する必要がある
- 新たに養成課程に科目を追加するとすれば、博物館と社会とのかかわりに関する科目が望ましい。具体的には、**博物館と福祉、観光、まちづくりといった博物館と社会の接点となりうる分野について概論として一体的に扱うことが望ましい**のではないかと考える。
- 現状定められている科目の内容を今一度精査することで、**科目数を増やさずに教育の質を向上**していけるものと考える。